

「寄宿舍」における歩行指導の可能性

千葉盲学校寄宿舍勤務
横井 晴代
吉田 松代

はじめに

盲学校の寄宿舍では歩行指導がなかなか進み切れない現状にあります。それには多くの問題があると思いますが、

- ① 職員の勤務時間の問題
- ② 舎生の生活時間のどこに指導時間を組み入れるか、という問題
- ③ 職員の指導に関する力量の問題

などがあげられます。学校ではこの指導はかかえきれず、舎生の生活指導に直接かかわる場である寄宿舍でこそ、歩行指導の大切さを痛感するのです。天気の良い休日をラジオを聞くだけで過してしまったり、買い物なども職員に依存する子どもが多かったのです。帰省には、車や親の腕に頼り切って帰っていく子どもたちを見る中で、生活経験を拡大し豊かな日常生活を送るために、そして何よりも将来自立した生活を送ってほしいという願いが、私たちを「何とかして寄宿舍の中で歩行指導を定着しよう！」という気持ちを生んだのです。

ここでは、約3年間に亘る本校寄宿舍における歩行指導の可能性を明らかにしたいと考えます。

歩行指導三年間の歩み

寄宿舍が生活指導の場であることは異論のないところですが、指導内容は充分確立しきれていない現状ではないかと思われます。将来、社会人として自立した生活を営んでいくために必要な力を、生活を共にする集団の中で削りあげていく指導が私たちに求められていました。

本校、寄宿舍における歩行指導は、動くことの非常に少ない子どもに当面して、行動する喜びや、一人で何でもできるという自信を持たせたいという願いがきっかけでした。野球をしても弱視生にはかなわないと思っている全盲生に、対等にしむことのできる力を身につけさせることや、外出時は全盲生と弱視生の二人組で歩くことが当たり前だったものを、一人歩きで外出させるなどの指導から始まりました。このように、子どもたちの生活に意識的に歩行指導が組み入れられてきたのです。

しかし、歩行知識・技術を持たない私たちは、歩行指導の必要性を感じつつも、失敗や疑問の連

続で指導の行きづまりを感じるようになってしまいました。このような中から「月例歩行会」— 寄
宿舎職員全体で行なう月1回の歩行研修会 — が持たれるようになったのです。昭和49年5月の
ことでした。それに並行して寄宿舍と学校の連携で「歩行訓練研究会」が発足し、職員の「歩行指
導」に対する意識の高まりが大きく、よりはっきりしたものになったのです。

全く専門的な知識を持たない私たちは、目が見えないとはどういうことなのか。その心理より
近づくためにも、アイマスクをつけて実際に歩いてみることを試みました。と同時に学校の養訓を
担当する篠崎友照先生を交えての「歩行訓練研究会」で学んだものを「月例歩行会」で全職員のも
のとしていく方法がとられました。月1回のこの研修が定着してくる中で、通勤時間を利用したり、
個々の勤務時間に合わせて、アイマスクを利用しての職員研修が進んできました。昭和50年3月
には「歩行訓練研究会」が大きな成果をあげ報告書を出すに到り、今までの全盲生に対する研究か
ら本年度は弱視生を対象とした研究へと新しい課題に向って行なわれています。これらを基礎に50
年度も寄宿舍で引き続き「月例歩行会」を持ち、職員の歩行力を高めながら子どもへの歩行指導が
行なわれています。

こうした中で、「1人で家に帰りたい！」という子どもの願いに応じて、勤務の中に、帰省指導
が位置づけられ、特に歩行指導を必要とする子どもをリストアップし、年間計画にそった指導など、
私たちの生活指導の分野のひとつとして確立してきました。

また、50年7月から2カ月間、本校寄宿舍職員の中から初めて「日本ライトハウス」で研修を
受けた歩行訓練士が生まれ、寄宿舍の歩行指導も、より充実したものとなりました。

主に、帰省時、外出時の指導など、子どもの生活のリズムに合わせた指導が、子ども自身歩行訓
練の必要性やその楽しみが解ってくると特別に時間を取って「歩行訓練を受けるんだ。」という姿
勢に変わり、50年11月ごろから「夜の歩行」と題して夕食後の30分から1時間位の練習を大
変楽しみにして取り組むようになりました。初めは小・中学部から始まった「夜の歩行」でしたが、
高等部生が「私にも歩行指導をお願いします。」と言ってくるなど、大きな輪が広がりつつありま
す。また、父兄の「歩行」に対する関心も高まり「ぜひ、研修会を！」との声に応じて、51年1
月31日「保護者歩行講習会」を開き、60名の父兄の参加を得、輪は保護者へも広がってきてい
ます。次に、「以上のまとめとして、現在中学部1年である全盲生のA君の今までの歩行訓練をふ
りかえっての感想文を載せてみたいと思います。」

『僕が歩行訓練を初めたのは、2年位前だった。その頃は、ただ歩ければいいだけで、あまり
重要なものとは思わなかった。しかし、実際やってみると難しく大変なものだった。5年生の
頃の僕の夢は、1人で家に帰ることでした。でも、母に言ったのだが、仲々ウンと言ってくれず、

僕の後から内緒でそとついて来ていたらしい。ある日、僕が家に帰る時、母とも寄宿舎の先生とも行き違い、五井駅まで1人で帰ってしまった。母も先生もいなかったと知った時、これで自分も1人で家に帰れるんだと言う自信がついた。それ以来、何回か母に頼んだが、1人では帰省させてくれず相変わらず白杖も持たせてくれなかった。5年の5・6号室のみんなで話し合った時もどこの家でも白杖を持たせてくれる、お母さんはいなかった。そこで部屋会議で帰省日には、白杖を持って帰り、家のまわりを歩く事に決めた。次第に母も白杖の事を言わなくなった。そして、姉は自分が目をつぶり白杖を持って歩いてみて、『よく杖1本で歩けるね。』と感心していた。僕には家の人が変わっていくのが、よく解った。また、寄宿舎では、土・日曜日を利用して舎の囲りを歩いたり、千葉に出かけたりしました。6年の3学期には市川にある幸夫君の家に僕たちだけで行く計画を立てたりしたが、それは無理だった。先生の反対もあったが、僕たちの力では無理だった。あのころは、大きな事ばかり望んだが、今は小さな事から身につけて行こうと思っている。最近では夜の歩行訓練もやっている。初めはあまり参加者がいなかったが、この頃は高等部生まで参加している。これは先生方が練習しているおかげだと思う。』

お わ り に

3年間の歩みの中で、寄宿舎での歩行指導の壁が決して乗り越えられないものではないことを私たちは確信しました。はじめにあげた3点の困難と思われた問題点についても、

- ① 交替勤務で1人の職員が、いつも子どもと一緒にいることのできない状況下でも、集団的な指導を確立する中で、
 - ・ 指導を引きつぐこと
 - ・ 勤務時間を計画的に組んでいくことによって解決されます。
- ② 舎生の生活時間と勤務時間の関係についても、まず職員が積極的に指導を進めることによって、舎生の中に位置づいてくるのです。
- ③ 職員自ら歩行知識・技術を身につけることが、歩行指導を推し進め、欠くことのできない原動力となります。

本校寄宿舎で歩行指導が定着しつつある最大の要因は、研修を毎月1回は必ず行なうという原則をくずさなかったことや、リストアップされた舎生の指導状況を職員会議の中で明らかにしていくなど、全職員の取り組みとして位置づけたことです。それは決してたやすいことではありませんでした。初めての試みに、はじめは足なみもそろいませんでしたが、ひとつひとつ解決していく中で、

着実にその成果を上げてゆくことができました。

寄宿舎の中での歩行指導がいくつかの問題をかかえながらも、日常生活の中に私たちの指導が着実に進められてゆくならば、舎生自身が指導を受けとめてゆくのです。寄宿舎は舎生の日常生活すべてにかかわる場であるからこそ、私たちの指導体制が整えられれば、その可能性は無限に広がっていくものと確信するのです。

昭和51年6月25日 印刷

昭和51年6月30日 発行

発行者	岩 橋 英 行
発行	社会福祉法人 日本ライトハウス 職業・生活訓練センター 大阪市鶴見区今津中2の4の37
印刷	アポロ印刷株式会社 大阪市東区北新町2丁目7番地